

異文化とコミュニケーション

M.K.
文学部2回生

私は2019年9月の3週間、京大のマギル大学研修に参加しました。このプログラムに参加したいと思った一番の理由は、ただ海外に旅行に行くだけでなく、そこで自分の英語力を向上させる機会が欲しかったからです。京大の留学情報を調べてみて、マギル大学研修には英語でのインタビューやプレゼンテーション、そしてホームステイといった内容が含まれていると知り、英語を話し聞きとる力を伸ばすのに非常に効果的だと思いました。また、マギル大学のあるモンリオールは多様な人種、宗教、文化がみられる都市であり、日本にはない多様性を直に感じたいと思ったことも理由の一つです。

実際に行ってみて、景観的にも人間的にもモンリオールが想像より素晴らしい都市であるとわかりました。午後に班に分かれてモンリオールの様々な観光地を巡ったり様々な施設にインタビューに行ったりする機会があったのですが、そこで見たあらゆるものが自分にとって新鮮で印象深いものでした。特に私が感動したのはノートルダム大聖堂とオールド・モンリオールという歴史的な街並みです。またモンリオールで3週間生活して分かったのは、そこでは当たり前のように異文化が共存しているということです。バスや電車の中で、白人系や黒人系の人々のほかアジアの人々も数多くみられ驚きました。ホストファミリーをはじめ現地の人々は親切で、道を尋ねると丁寧に教えてくれたりしました。多様な文化を受容している都市であるためか、そこにいる人々は見知らぬ人々にも寛容といった印象を受けました。私も彼らのように異文化に対して柔軟な思考を持つとともに、他人に対して閉鎖的にならないようにしようと思いました。

もう一つ重要な学びとして、このプログラムの中で私は自分の英語力の未熟さに気づかされました。クラスでもホームステイ先でも、自分の言いたいことを英語で何と表現すればいいかわからず口をつぐんでしまうことが多々ありました。しかし積極的に発言しようとするクラスメイト達を見て、完璧でなくとも伝える努力をしよう頑張りました。根気強くコミュニケーションを取ろうと努力し、ホストマザーとかなり仲良くなることができました。日本に帰っても、英語日本語に関わらず自分の意見を積極的に伝えようとする姿勢が大事だと学びました。

私はまだ2回生なので将来の展望は具体的には決まっていますが、将来英語を使う機会に頻繁に出くわすと思います。これからも勉強を続け、より円滑なコミュニケーションを目指したいです。また、マギル大学研修で行ったグループワークを活かして、集団の中で自分の意見をしっかり持ち、それを積極的に発言することを意識したいです。

多様な文化が共存するモントリオールでの学び

K.H.
文学部2回生

私は「英語に対する恐怖心を解消したい」という理由で、マギル大学での短期語学・文化研修プログラムを志望しました。私は大学入学後、周りの学生や留学生の英語力の高さに自信を失い、英語を話すことを怖がっていました。しかし、2回生になって英語の重要性を再認識し、英語の授業を受けたり、留学生と交流するために、英語をもっと学びたいと考えるようになりました。マギル大学でのプログラムでは、現地で行う調査を基にした発表の機会があること、文化体験ができることが大きな魅力です。一番の不安要素である「英語力の低さ」を授業で改善しつつ、プレゼンテーションの準備やホームステイを通してカナダの文化や環境について学ぶことが出来ます。自分の殻を破り、英語に対して抱えている恐怖心を解消するための一歩として最適なプログラムだと思いました。

このプログラムのおかげで自分のレベルを知ることができ、今後の英語学習の方針が明確に定まりました。また、クラスの先生だけではなく、年齢の近い現地の大学生も学習を手伝ってくれるため、質問や会話がしやすい環境でした。モントリオールの公用語はフランス語なので、街を歩くとフランス語が飛び交っています。皆当たり前のように英語とフランス語を使い分けており、日本との意識の違いに驚きましたが、言語学習へのモチベーションが高まりました。移民の国と言われているだけあり、様々な背景を持つ人たちと交流する機会が多かったです。たった3週間の滞在でも、それぞれの文化を尊重し合い、受け入れる姿勢を感じることが出来ました。

プログラムが始まるまでは「英語に対する恐怖心の解消」が一番の目標でしたが、日本では中々触れることの出来ない文化の多様性を肌で感じ、「英語を始めとした言語を使い、異なる背景を持つ人とコミュニケーションを取る」という新しい目標が出来ました。英語力向上が最終ゴールなのではなく、目標を達成するための1ステップに変わったことは自分の中でとても大きいです。マギル大学での短期語学・文化研修プログラムで得た経験を活かし、帰国後は英語の学習に励みつつ、留学生との交流にも挑戦したいと考えています。これからも学び続ける姿勢を忘れずに頑張ります。



私がカナダで手に入れたもの

山本 あすか (Asuka YAMAMOTO)

文学部4回生

そもそもこのプログラムに参加した理由として、1回生のころから海外留学に関心があったものの勉強やサークル活動を優先した結果できていなかったため、卒業前に一度行ってみたいことがあげられる。また、来年から社会人として働くことが決定したのだが海外への転勤もありうる会社なので学生の中に英語でのコミュニケーションスキルを身につけておきたかったのも理由の一つである。

このように学生最後の成長機会として申し込んだ本プログラムであったが、想像以上に吸収できるものは多かった。まず、メインである地域社会のグループ学習に関して報告したい。私は環境・アート・多言語・宗教の中から宗教分野を選択した。これは4つのテーマのなかでも特に、日本では考える機会が少ないと感じたからである。3週間の授業の中で私たちは5つの宗教施設へのインタビューに向けて事前準備をしたのちに、10個の質問事項をそれぞれのホストにぶつけ、それに関する発表を行った。私たちの班はこれらの学習を通して、宗教というのが単なる生活の一部ではなく自分の人生の志を支える道標であるという結論に至った。日本は、信仰の自由を訴えながら、様々な宗教を受け入れる体制があまりにも整っていない。これは宗教に限らずいえることであると思う。私は日本にも少なからず自分の生き方の指針となるような宗教を欲する人が存在すると考えている。もっと多様な人が自由に言論できる環境づくりを整えることで、日本はもしかすると新たな成長をみせられるのかもしれない。

授業のみならずホストファミリーやモニターから学ぶことも多かった。彼らの多くは他国からの移民で、多言語での会話を当たり前としていた。皆が融合的な社会を受け入れ、楽しんでいた。そして彼らはみな自分の出身地と同じくらいに、モントリオールという街を愛していた。私はこの愛し方と日本人が日本を愛しているのとは少し違う気がした。多民族地域を愛するというのは、居心地がいいということのほか常に自分の知らない文化を楽しむことのできる気概と好奇心が備わっている必要性があると感じた。

私はこの3週間の経験を通して、多様な人同士の共存を実感することができた。もちろん英語でのコミュニケーション能力も向上したがこの精神的な経験は今後社会人生活を送るにあたって貴重な財産になったと感じている。



人生のヒント

服藤 佳織 (Kaori HARAFUJI)

教育学部 4 回生



私は、これまで外国に行ったことがなく、留学をして海外経験を得ることを大学生活の目標の一つにしていました。単純に外国一般に対して興味があるということに加え、自分の専攻である図書館情報学の研究や進路である大学職員としての活動を見据えると、4回生の夏というタイミングで今回の留学の機会を得られたことは大変幸運であったと思います。

プログラムにおいては、マルチリンガリズム、ヴィジュアルアート、都市機構、宗教と多様性という4つのグループに分かれて、それぞれのテーマの研究をメインに活動しました。

私は、宗教と多様性というグループに所属し、多文化社会のカナダにおける宗教と多様性の在り方について学びました。このテーマを選んだのは、日本において宗教に対する厳格さをあまり感じずに育ってきたという実感があるために、外国における多様な宗教の価値観の共存に対し興味を持っていたからです。その中でも私が一番関心を持っていたのは、人々が自分の信仰する宗教に関する誤解が存在するという実感を持っているのかということでした。インタビューの中でこの質問をすると、必ず「Yes」という返答があったことが印象に残っています。しかし、誤解があることを受け入れ、尊重と意思疎通の努力を怠らないことで課題を乗り越えていきたいという考え方がどのインタビューでも聞かれたこともまた、印象深かったです。インタビューの中で得られた、人間は自分が知らないもののことを恐れてしまう、という言葉は、優しさや寂しさ、達観のようなものとともに胸に刻まれました。

インタビューや学校での活動だけでなく生活全体を通して、カナダの方々、多様な民族や価値観が共存しているために、他者に対してかなり寛大な考え方を取っていることがうかがえました。尊重とコミュニケーションが、共存の鍵を握っているように思います。



今回の留学の費用を得るためにアルバイトにたくさんの時間を費やしましたが、それ全部も含め、自分にとって貴重な経験、そしてお金で換算できないような素晴らしい時間を過ごすことができました。今後、専攻している図書館情報学の研究を進めていったり、大学職員として活動したりする中で、今回の留学で触れた多様な考え方や、他者尊重の気持ち、留学する際の悩みや不安とその克服の体験などを生かしていきたいと考えています。たくさんの交流と自分との対話ができただけの時間となりました。

学校や生活で関わった現地の方々、インタビューの中で出会った方々、プログラムに参加している京大生のメンバーと、出会いやご縁に大変恵まれたように思います。私はこれまで、どこか自分が周りとは違うような気がして、自信が持てずにいました。しかし、この留学の間に出会った人々の寛大な考え方に触れたり、多くの時間を共にして親密になった留学メンバーたちと交流したりする中で、自分が抱えていた悩みの塊のようなものがずっと軽くなったように感じました。人生が変わったという大げさな感じがしますが、間違いなく、自分の人生にとってプラスをもたらした経験となりました。今回の留学に関わってくださった方々、応援してくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

Active, Positive, Montreal!!

匿名希望
法学部生

カナダ・モントリオールでの3週間にわたったホームステイ・マギル大でのプログラムは新たな発見と驚きの連続であった。観光で最も記憶に残っているのは、鉄道・バスの車窓から眺めた風景の、土地の広大さである。見渡す限り、あたり一面耕地・牧草地であった。日本で新幹線から眺める車窓風景、左右に山々が存在感を持って連なり迫ってくるものとは異なる。土地の平坦さもあいまって、カナダの国土の広がりや雄大さを感じた。

このプログラムに参加しようと思った理由は正直に言えばごく単純なものである。自分の英語の能力を高めたいと思ったことと、初めてのカナダに行ってみたいと思ったからだ。

このプログラムを通じて、自分の中での発見が何点かある。

プログラムに携わってくれたモニターとの交流を通じて感じたのは、彼らが高度なコミュニケーション能力を身に着けているということだ。ファニーでユーモアのあるモニターが多く、実に尊敬させられた。彼らと話していると楽しい気持ちになった。僕の個人的意見だが、モントリオールには人種や国籍が本当に多種多様であり、その多彩なバックグラウンドを持った人々が入り混じった空間が、彼らの内面の他者に開かれた心、そしてコミュニケーション力を作り出しているのではないかと感じた。実際に僕の班のモニターは、一人は両親がバングラデシュ人で顔はインド系、もう一人は中国系の両親を持った中国系で、国籍の多様性を感じた。

次に、意外と日本人と Montrealer(モントリオールに住む人の意味)の違いがよい意味であまりなかったことだ。最初行く前は、違う国籍ゆえにわかりあえないことが多いのではというイメージを抱いていた。だが実際に行ってみると、いろんな面で共感しあったり、共通の話題で盛り上がったり、時にギャグが受けたり、心配しあったり、こういうところは日本人と同じだなとか、人間であるがゆえの共通の考え方だとか論理的な思考だとか直観だとかフィーリングだとか、肌の色や生まれ育った場所が違っても分かり合える(友達になれる)ことに気づけたことで、世界を近くに感じられるようになった。

また、日本との比較で、やはり向こう(モントリオール)はカラフルである。異質なものが混ざり合い、それがふつうである。黒人も金髪西洋系もフランス黒髪美人系も中国系もインド系も、日本人もギリシア系も、確固として存在し、共存し、ふつうに友人同士としてくっつき、溶け込み、また他方では分離して存在している。日本は基本的に同質な顔立ちばかりの民族なのでカラフルさはあまり感じない。そこが違いとして感じるところだ。

このプログラムと、9/24の振り返り報告会を通じて、私はあることに気付いた。私は個人的な自分の心のうちに、日本よりほかの国の文化のほうがいい、日本人は細かく、ストレス体質で時間にうるさすぎる、寛容さがない、心が狭く人生に彩りがなく、と、まさに、けちよんけちよんに否定し、海外欧米文化を賛美することで自己のアイデンティティを確立しようとしていた。しかしそれは、二極化(自分と違うものは「悪いもの」、異文化は自分を「否定するもの」)の日本と外国が反対になったバージョンだと気付いた。(ふつうは、日本文化が、自分が肯定している文化で、それと合わない外国の文化を異質なものとして排除する。反対に僕

は、欧米圏の文化こそが自分に合っていると感じ、その基準に合致しない日本文化を、その良い側面は見ずに無視して「だから日本はダメなんだ」という風に毛嫌いしていた節がある。) だが僕が抱いていたそれは二極化の完全なる裏返しで、思っていたところとはつまるどころ同じであることに気付いた。これに気付いたことは大きな進展であると感じている。今後、自分が無意識に好ましく思っていなかった日本文化や日本人の性質をもっと深く理解し、悪いところをあげつらうばかりでなく様々な文化と比較して良い部分を探り出し、自らの「日本人」というアイデンティティーを深めていく努力をしていこうと思う。

しかし飛行機が日本に近づき、関西空港の地に足を踏み入れたときにはやはり、心から胸をなでおろすようなほっとする感覚と懐かしさ、家に早く帰りたいという感覚を覚えてしまう。

このプログラムが、今後、将来的に、英語力を向上させていくことと、日本すなわち自国文化に対する理解並びに包容力をつけていく一歩になったと感じた。将来、日本ではなく海を越えた別の国で働いてみたいという意欲に、今回のプログラムで得た自信が結びつき、ぼんやりとしていたものが形を持って現実にできるのだというビジョンを得た。将来海外に出た際にも、同じ人間同士分かり合えるのだという感覚を忘れずに、恐れず挑戦していきたい。

このプログラムに参加する人に向けて。とにかく会話における積極性が大事だと思う。話題なんて別に何でもいいし、大した返しができなくてもいい。聴き手だけになるのではなく、自分から自分の言葉で脳内にあるしゃべりたいことを、情報を、英語で発信しようと苦闘することが、カナダという環境に身を置くことのメリットです。日本人は自らの発信に対し消極的ですが、自分の成長と、”When in Rome, do as the Romans do”を胸に抱いてトライしてみてください。

視野の広がり

大西 菜々子 (Nanako ONISHI)

法学部2回生

私がマギル大学への短期留学を志望した理由は、英語の会話力を日常で試し、向上させることであった。もちろん日本でできることもたくさんある。英会話についての授業やオンライン英会話を受講してきた。が、実際に必要に迫られて英語を話す機会は、日本では少ない。その中で、発音クリニックなどで訓練し、実地研修などの、マギル大学への短期留学における独自のプログラムはそんな私に大変適するものだと感じた。まず、海外に出ることによって、英語を話す機会が増えることはもちろんのことだが、発音を正しくし、英会話により自信をつけた上で、実際に会話をしたり、人前で話す機会を得たりすることはマギル大学のプログラムならではのことであり、そこに魅力を感じた。

また、マギル大学の位置するモントリオールは、私が第二外国語として学んでいるフランス語の圏でもあり、そこに根付くフランスの文化も感じ取りたかった。

実際、この研修中では、クラスモニターや先生が積極的に英語で話しかけてくださり、それに答えようとする中で、英会話の楽しさをおぼえ、自分から積極的に英語で話そうとするようになった。また、授業中や、クラスモニターを交えて参加者同士で話す場合にも英語を使うことで、お互いの意識を高め、より英語で話す機会を増やすことができた。また、英語でインタビューする機会を得たことにより、ただ話すだけではなく、初対面の人に対してどのように丁寧に話すか、またより臨機応変に英語を話すかを訓練することもできた。そして、そのインタビュー内容として私が選択した multilingualism は、モントリオールの現状や歴史、文化をより深く知ることにつながるとともに、自分自身の国際社会への姿勢を変えるきっかけとなった。多国の移民を抱えながらも、フランス語を守ろうとする姿勢もみせるケベック州の存在はとくに私に多文化の調和する方法を考えさせ、自らもその多文化理解を深める方法として言語習得の大切さを学んだ。また、多くの言葉を操る人々を目の当たりにすることで、言語習得への意欲を高めることにつながった。一方で英語があることによって異なる母国語をもつ人々が会話できるようになり、お互いを尊重し合う、モントリオールの人々の姿勢は印象的だった。



このプログラムで身につけた言語能力と発言力を日本でも維持し、国際社会へ飛び出せるよう、多文化理解を深めていきたい。特に、モノリンガルの傾向にある日本では多言語を話すことを難しいと思われがちであるし、話す機会も少ない。そんな中でも、積極的に語学力を高め、視野を自分なりに広げたい。

カナダで学んだこと

K.F.
経済学部 1 回生

私がこのプログラムに参加した目的は2つある。1つ目は英語力の向上である。私はまだ1回生であるが、英語力、特にリスニング力とスピーキング力は身につくまでに時間がかかるため、早くから本格的な英語を学びたいと考えた。2つ目は異文化に触れることである。行ったことのないカナダという国の文化を体験してみたいと思った。また、モンリオールは英語とフランス語が共存するケベック州にあるため、その文化や多様性にも興味を持った。

私はこのプログラムでグループワークのテーマにモンリオールのビジュアルアートを選択し、主に英語とアートについて学んだ。英語については、3週間という短い期間であるため、目に見えて上達するとは考えていなかったが、3週間努力し続けることで、行く前より早い英語を聞き取れるようになり、自分の言いたいことも表現できるようになったと感じた。そしてなによりも自分の英語の未熟さを実感することが、英語をもっと頑張ろうというモチベーションにつながった。アートについては、私は経済学部にも所属しており、普段学ぶことのないアートの学習は自分にとって新鮮で面白かった。アーティストへのインタビューは、慣れないアートについての内容を英語でおこなうということで苦労したが、とても貴重な経験となった。モンリオールのアートについて学ぶことにより、身近にアートを楽しむことのできる街であるモンリオールの文化についての理解をより深めることもできた。

他にも、先生、モニター、ホストファミリーなどとのコミュニケーションの機会が多く、多くの英語を聞き、話すことができたため、英語力の向上と共に、英語を身近なものと感じることができた。また、ほぼ日本語のみで生活する日本と違い、英語とフランス語が共存するモンリオールで日常的に多言語に触れることにより、短い期間でもそのような環境に慣れることもできた。そして、モニターとモンリオール市内を観光したことや、休日にオタワ、ケベックやトロントに行ったことでカナダの様々な文化も学ぶことができ、特にケベックやトロントに行くことは自分たちで計画したので、自主性や行動力も養うことができた。

3週間という短い期間であったが、このプログラムで多くのことを学ぶことができ、短期間であってもやはり海外を経験できる機会は貴重であった。私は1回生で大学生活は始まったばかりであり、今回学んだことすべてを今後の生活の中で生かしていきたいと思う。英語力の向上については、このような海外を経験できる機会の積み重ねが必要であると感じているため、今後も英語学習について努力を続け、またこのような留学プログラムに参加させていただければと思う。

How I overcame my fear of speaking in English

柳 正栄 (Jeongyoung YOO)

経済学部 2 回生

私は、旅行好きな親の影響で小さい頃から様々な国を旅行し、自然と海外で勉強をしたいという夢を持つことになりました。そして、今日本で留学しながらその夢を実現することができました。しかし、学校やバイト先で欧米の人々と会うたびに言語の障壁を感じ、彼らと会うこと自体にも拒否感を持つことになりました。グローバル社会で生きていく中でそのような拒否感を持つことは大きな障害になるだろうと思い、克服したいと思いました。特に、受験英語能力よりは実用的な英語能力を身につけることが大事であると考え、マギル大学の短期語学研修プログラムに応募しました。



カナダではテーマ別に4つのグループで分かれて活動する事が多く、私は持続可能な発展を勉強しました。最初カナダに着いた時は全てが英語またはフランス語であり、英語で喋らなければいけない事をちょっと怖く感じました。しかし、ホストマザーとも一緒に食事をする時に話し合いながら英語を話すことに対する恐怖や拒否感は無くなりました。間違える事が恥ずかしくて話す事が怖かったが、カナダでは意味さえ伝われば良いと思うようになったことも拒否感をなくすことに役立ちました。授業では、英語の記事や文書を読んでインタビューの質問を作り、実際の関係者達とインタビューをする事ができたのはかけがえの無い経験でした。最終プレゼンテーションでは一人8分くらい英語で話すことになりましたが、その時は最初カナダに着いた時よりも自信を持って話す事が出来ました。モントリオールの持続可能な発展を日本で適用できるかについての発表でしたが、この3週間、母国語の韓国語で考えながら英語で授業を受けたり日本人の友達と日本語で話したりすることは簡単ではありませんでした。しかし、たくさんの友達と思い出を作り、英語だけでなく与えられた新しい環境に適応する方法も学びました。将来は、積極的に英語でコミュニケーションをとりながら国際的な理解を深めたいと思いました。

これからの社会で必要なもの

松尾 有希也 (Yukiya MATSUO)

経済学部 2 回生



僕がこのプログラムに参加しようと思った理由は、大学在学中に英語力を少なくとも日常会話レベルにまで上げておきたかったからである。英語に関しては受験勉強の科目として勉強しただけで、英語を使ってコミュニケーションをとることに限っては全くの素人であった。かといって普段の大学生活において英語力向上が期待できるような経験はほとんどなかった。しかし京都の町は一步繁華街に出れば、外国人で溢れかえっており、日に日に自分が英語を喋れないことへの不安が募っていった。そんな時、このプログラムを見つけ、時間を自由に使える今の自分にとって絶好の機会だと思い、応募した。なぜニュージーランドではなくカナダにしたかという、何となく北米がいいなと思っただけであり、特に深い考えはない。

このプログラムで一番感じたことは、自分は思ったより何倍も英語を話せない、ということである。僕は中高6年間英語を勉強したのである程度の会話はできるだろうと思っていたが、いざ相手を前にすると、文法どころか単語すら出てこない。このままでは国際社会から除け者にされてしまうと強く感じた。しかし、それ以外にも多くのことを学んだ。まずは、多様性の何たるかに触れることができた。異文化理解、多文化主義など国語の試験の評論文では嫌というほど見たが、実際にそれが社会にどのような形で表れているかは見たことがなかった。日本で観光客以外に外国人を見かけることは少ない。それゆえ、学校や交通機関の中など社会のほとんどの場所で、日本人に囲まれている。しかしモントリオールは違った。そこでは、見た目だけで人種の違いがわかる人たちが当たり前のように共存している。黒人と白人の高校生が広場でともにしゃぎ回り、ブルカを着た女性は異教徒の友人とカフェでお茶をする。日本ではありえない風景が、モントリオールの日常だった。また、寛容さを持つ、ということも学んだ。モントリオールの人々は寛容で親切な人が多かった。歩いていて人にぶつかった時、謝らない人などまずいない。さらに、僕がバスの中で寝ていた時は、終点間際になると、乗り過ぎさないように起こしてくれた人もいた。先ほどの話に通ずるが多様性のある社会が成り立つためには他者に親切であり、寛容であることが不可欠なのだろう。だからこれからの時代は英語力だけでなく、寛容さなどの内面的な良さも必要になってくると感じた。

まずは英語を必死に勉強しなければいけないというモチベーションを得たので、しっかりと学習を進めたい。また、来年の交換留学も視野に入れようと思っている。それから先ほども書いたが、他者に寛容であろうと思う。異文化間だけでなく日本人同士でも、お互いに寛容でありたいと思う。

初の海外経験で得たもの

N.T.
経済学部4回生

私は卒業後、金融機関に勤め、定常的に英語を使用することが予想されるためこのプログラムに参加した。カナダを選んだのは綺麗な英語のイメージがあり、初学者にとって難易度が高くないと思ったからである。実際はフランス語が多数を占め、様々なアクセントの英語に触れることとなった。

このプログラムはさまざまな気づきを与えてくれた。同じホームステイ先にコロンビアからの留学生がいたのだが、彼の質問は私にとって新鮮であった（なぜ中国の文字である漢字を使用するのか、人口減少社会において移民が必要なのではないか、原爆を落としたアメリカに対しヘイトはないのか）。これらの質問はすべて答えがたく、彼らがいかに普段から社会問題について考えているのかを学んだ。日本においては、享受できるサービスの質の高さ、平和等を当たり前と感じ、社会について関心を抱く人が少ないように感じる。これらの問題を若者がしっかりと考え、個人の意見を持つことは、これからの国際社会を生き抜くために非常に重要なことであると感じた。

また、広大な国土というのは国家としてたいへんな強みであると感じた。豊かな大自然、伝統的な建物はもちろんのことだが、スポーツのグラウンド等を惜しみなく作ることができるのは非常に魅力的である。実際にマギルのスポーツグラウンドを見たが、質が高く、日本が太刀打ちするのは難しいのではないかと感じた。とにかく、外国人と円滑にコミュニケーションをとるには、異文化、歴史を理解することが非常に重要であると感じた。文化や歴史が彼らの考え方を形作るからである。

また、主体的に意見を発信していく重要性を痛感した。私は日本語においてさえ、簡潔に必要なことだけを伝達しているようにしている。しかし、それでは、特に外国においては意見のない人間であるとみなされてしまい、良好な関係を築けないのではないかと感じた。

このプログラムを通して学んだ、主体的に意見を発信すること、相手の文化、価値観を理解し尊重することを実践していきたい。

自分を変えた三週間

N.H.
医学部2回生

私がこのプログラムに参加した理由は二つあります。一つ目は、英語力を向上したいと思ったからです。英語に対してはもともと苦手意識があり、特にスピーキングに関しては、自分の内気な性格もあって自信がありませんでした。そのため、このプログラムを通して英語への苦手意識をなくすとともに、積極性を身につけ、拙い英語でもコミュニケーションが取れるようになりたいと考えました。二つ目は、日本とは異なる考え方や文化に触れて、視野を広げたいと思ったからです。今まで留学経験がなかった私は、日本とは違った文化の存在する海外での生活をしてみたいという思いがありました。このプログラムの留学先であるモントリオールは移民が多い地域であったため、たくさんの文化に触れ自分の視野を広げることができるのではないかと思います。志願しました。

モントリオールでの三週間は驚きと発見の連続でした。中でも特にこのプログラムのメインともいえるグループでの活動から学んだことが印象に残っています。私のグループのテーマは

「bilingualism/multilingualism」で、ケベック州の歴史や法律の観点から、フランス文化が重要視されてきた背景やどのような過程で人々が三つ以上の言語を獲得するのかについて理解することが出来ました。そして、さまざまな人種の人々が共存する社会において、自分とは異なる言語や文化、価値観を受け入れ尊重していくことが大切なのだということを強く感じました。難しいテーマではありましたが、グループディスカッションは英語力の向上に役立ったと思います。また、ホームステイの経験も心に残っています。最初の一週間はなかなか思うようにコミュニケーションが取れませんでした。しかし、ホームステイ先では家族のルールに従って生活するため、尋ねることや許可を得ることが必要になります。また、ホストファミリーとの関係を深めるためにも会話が重要になります。そのため、自分から積極的に話しかけることが大事だと強く思いました。その結果、三週目にはホストファミリーにも褒められるほど積極的に話すことが出来るようになり、自身の成長を実感しました。

私は将来看護師になりたいと考えています。近年では、外国人観光客の増加に加えて日本に在住する外国人が増えているため、病院で外国人を受け入れるケースも多くなっています。そのため医療現場では、病気やけがで精神的に不安を抱く外国人患者に対して、世界のコミュニケーションツールの一つである英語で対応できる看護師が求められています。また、海外の先端医療技術を学ぶためにはやはり英語が聞き取れて話せることが不可欠です。そのため、今回の留学で学んだ“文化や価値観の違いを認め合い、他者に優しくする”ということを念頭において、英語での対応ができる看護師となって社会に貢献したいです。

異文化との交流で学んだこと

M.I.

薬学部2回生

私がこの留学プログラムに参加した理由は主に3つあります。それは英語でのコミュニケーション能力を向上させたいから、現地の同世代である大学生と直接交流できるプログラムだから、以前訪れてすごく気に入ったカナダをもう一度訪れたかったからです。英語のコミュニケーション能力向上のためには英語を日常的に用いる環境に入るべきだと思い、プログラムへの参加を決意しました。プログラム内では、3週間に渡りモンリオールのマルチリンガリズムについて学びました。その中で、現地に住む多くの人が3言語以上話せるのはもちろん、移民の多くの子供は6歳からいきなりフランス語の学習を始めるのにほとんど不自由なく流暢に話せることに衝撃を受けました。これについては賛否両論あり、法律的にも歴史的にもケベック州にとって難しい問題ではあるものの、やはり日本のように日本語さえ話せば何不自由なく話せる環境下にいるとほかの言語の能力を伸ばすには限界があるのではないかと感じました。また、現地の人々はマルチリンガルであることで、自分のルーツに誇りを持っていて一定以上の知識を持っている上に、他国の文化や習慣、他の宗教に対しても寛容であると感じました。日本も少子化で多くの移民を受け入れようとしている今、この心持は見習うべきだと思います。多くの異なる文化の人々がともに暮らしているがゆえに、自分の意見をはっきり言葉で伝えることの大切さも感じ、トピックについてグループで話し合う中で自分の意見を正直に英語で伝える能力は上がったと感じています。このプログラムを通して身につけた自分の意見を伝える能力や異文化への理解など日本でも生かせる部分を忘れないように維持していこうと思います。また、将来はもっといろいろな分野、専門分野についても英語で多くの人たちと意見交換したり議論したりできるように文法や語彙力を向上させつつ、もっといろいろな文化や分野に興味を持ち、お互いに尊重し理解しあえるような関係を築けるようになっていきたいと思います。また、もっと日本について知ろうと思います。日本の歴史や文化について知り、自分たちの文化に誇りを持ち、日本人としてのアイデンティティの確立しておくことが異文化と交流する上で必要だと感じました。

Don't be shy.

S.S.

工学部2回生

私がこのプログラムに応募した目的は英語力を向上させるため、並びにカナダの文化を学習するためでした。自分は将来エンジニアとして海外で活躍したいという目標があり、そのためには英語を使えるようになっていなければならないと考えました。また、カナダは多民族国家で多くの移民を受け入れており、文化的にかなり多様であるため日本とは異なる点がたくさんあります。そのような文化を体験することで自身の価値観を豊かにできるのではないかと考えました。これらがこのプログラムに参加しようと思った大きな理由です。

このプログラムに参加して感じたことは、英語は話さないと伸びないということです。プログラムが開始した当初は、自身の英語力の低さに起因するためらいの心から、なかなかホストファミリーと会話が続き、しんどい思いをしました。その状況を一変させたのはホストマザーの Don' be shy という言葉でした。その言葉を受けて心機一転、つたない英語ではあるものの、少しずつマザーとも話せるようになりました。この体験から感じたのは、大切なのは正しい文法やきれいな発音というよりも自分の意思を伝えようとする熱意であるということです。また、文化についても日本とは大きく異なっていました。最も印象的だったのは電車に時刻表がなかったことです。仕事が全体的に雑である一方、その他の関わりではカナダの人々の優しさを感じる場面も多かったです。これは、仕事は丁寧である一方、他者との関わりの少ない日本人とは対照的でした。さらに、カナダは文化が多様であるので、異文化に対しても寛容であり、この姿勢もあまり日本人には無いと感じました。このように、異文化を直に体験することで日本の文化のよい点悪い点がわかるようになったのも今回の留学を通して得た学びの一つであります。

今後の目標について、まずは英語のさらなる学習です。英語を話すことの大切さを肌で感じる事ができたので、今後は積極的に英語でコミュニケーションをとっていきたいと思います。また文化については、今回の留学をおして今までよりも興味が深まったので、他の文化についても学んでいきたいと思うようになりました。ここに書いたこと以外にもたくさんを今回の留学で学びました。これらのことを今後の生活で活かしつつ、自身のさらなる成長につなげていきたいと思っています。

有意義なカナダでの3週間

S.T.

工学部2回生

私がマギル大学短期留学プログラムに参加した理由は2つある。1つ目は英語力を向上させたかったからである。研究やビジネスにおいて英語は非常に重要であるが、私は今まで英語学習に力を入れていなかった。そのため、短期留学プログラムに参加し、英語力を集中的に鍛えようと考えた。2つ目は、カナダの社会、文化、産業に興味を持っていたからである。カナダは世界で最も移民に寛容な国の一つであり、私は人々が多様性についてどのように考えているのか興味を持っていた。また、工学部の学生として、近年AI研究が盛んとなっているカナダに興味を持っていた。

現地での授業や、インタビュー、ホームステイ等、私は留学期間中に多くの英語を話す機会を得た。留学生活が始まった直後は、私はあまり積極的に会話に参加することが出来なかった。しかし、それではいけないと思い、だんだん失敗を恐れずに積極的に会話することが出来るようになったことはいい経験である。また、ネイティブ、上級話者との会話の中では、彼らが好んで使う表現や、カジュアルな場面で用いられる表現を学ぶことが出来た。たった3週間の短期留学で私の英語力が飛躍的に向上したわけではないが、日本では学ぶことが出来ない多くのことを学び、これからの日本での英語学習の指針を得ることが出来た。

また、文化や社会についても多くのことを学ぶことが出来た。私の予想通り、カナダは人権や環境問題について日本よりもリベラルな考えを持っている人が多いようであった。多様な民族、文化、人種が入り交じる中で人々は他人を尊重していたし、環境を守るために生活習慣を変えた人にも出会った。しかしながら、同時に多くの問題を抱えていることも印象的だった。市中で数多くのホームレスが物乞いをしていることや、ケベック州政府のフランス語、文化保護政策の中で英語話者、フランス語話者それぞれに一定の不利益が生じていることにはとても驚いた。

今回の留学では、自分の英語力の無さを痛感するとともに、拙い英語でもなんとか自分の考えを伝えられたことには感動を覚えた。今後も英語学習を継続し、研究やビジネスにおいて、海外の人々と上手くコミュニケーションをとれるようになりたいと思う。また、これからも様々な文化についての見聞を深めていきたいと思う。



留学を通して感じた日本の現状

K.O

農学部2回生

日本の英語学習において、読み書きは大学入試においてメインとなる部分であるため、受験勉強を通してある程度の能力を得ることができた。しかし、話す・聞くの部分においては、ろくな勉強をしてないため、全くできないままだった。世界的に見れば、英語を話せることは必須の条件であるため、英語を使う職業に就かなくても、将来的には英語を使いこなせるようになりたいと思った。そのような経緯から、自分の英語力を向上させるために、高校生の頃に大学生になったら留学をしようと決意し、今回参加することを決めた。行先をモントリオールに決めたのは、二つの言語が使われている都市であるのとヨーロッパの文化が根付いているからである。二つの言語があるため、より多くの文化に触れることができ、自分が前々から堪能したかったヨーロッパの街並みが見られると思ったので、モントリオールに行くことに決めた。

このプログラムにおいて、モントリオールの環境問題について学んだ。日本と違って、モントリオールは環境問題に対する意識が高く、新しい発見も多かった。日本に適応できるようなシステムも多く見られたので、日本も環境問題に対する意識を向上させるべきだと思った。また、英語とフランス語のバイリンガル都市であるが、長年やっている英語ですらまともに習得できていない自分にとって、コンビニの店員や薬局の店員もほとんどみんな両方の言語を違和感なく扱っているのに感心すると同時に、日本人の言語能力の低さを改めて痛感した。ますます自分の英語力を向上させたいという気持ちが強くなった。特にフランス語のなまりが強い英語を聞きとるのが自分にとって難しく、違ったアプローチの勉強が必要だと感じた。

将来どんな職業に就くかはまだわからないが、このプログラムで得た環境問題に関する知識を用いて、環境への影響を考慮しながら、物事に取り組む姿勢を持ちたいと思った。また、日本人は環境問題に対する意識が希薄であるため、多くの知識を周りの人々とできるだけ共有することが大事だと思った。それから、言語習得に対するモチベーションが今回のプログラムでさらに高まったため、英語の勉強を以前よりも増やそうと思った。特にリスニング力をもっと向上させないといけないと感じた。

留学を通して得られたもの

H.Y.
農学部2回生

私は去年の夏にアメリカの大学に留学をしたのだがそこで日本とは違った様々な国から来ている人と交流することができ、自身のコミュニティーを広げる貴重な体験をすることができた。また将来海外の大学院に進学したいと感じており、アメリカ以外にもイギリスやカナダにも留学したいと思っており、今回この留学プログラムを見つけて是非参加してみたいと思いこのプログラムに参加しようと思った。

今回、このプログラムに参加して私はモントリオールの都市環境保全について学習したが、モントリオールは非常に都市環境保全に積極的であり日本にはあまり見かけられない屋上農園など様々な取り組みを行っていた。日本はそれに比べるとほとんど何も取り組んでいないように思われたので、モントリオールに習って都市保全に向けて様々なことが出来るのではないかと思わされた。モントリオールでは移民も多く、フランス語と英語は当たり前のようには話されるが、それ以外にも様々な言語が話されており、多少言語が分からなくとも彼らはとても親切に接してくれ、街の雰囲気自体が移民が多いこともありとても寛容であると思った。またホームステイ先には、ほかの留学生も沢山いて私以外にも日本から3人、メキシコから1人、ブラジルから1人、中国から2人と多くの留学生がおり彼らと3週間交流することが出来たのは以降の文化について聞けたりしたり、また習慣の違いなども感じられてとても楽しかった。

週末にはホームステイ先の友人とケベックなど色々なところに出かけることが出来たり、友人の誕生日を祝ったのもとてもいい思い出になった。

私は今回の留学を通して、自身の価値観に少し変化が生じたように思う。私自身言語自体はコミュニケーションのメデイウムの存在でありそこまで重要とは思っていなかったのだが、今回の留学を通して、色々な人と出会い話をしている自身が英語と日本語しか話せないよりほかの言語にも堪能であることでよりコミュニティーを広げることが出来るのではないかと思わされた。また、機会があれば留学したいと思っているのでそれまでに英語力の向上だけでなく、自分が興味のある言語に新たに手を出してみたいと思わされた。

3週間という期間は私にとっては本当にあっという間であったが、いろいろな人と出会いまた語学の面でも今までは違った考え方を持つようになることができたので本当に良かったと思う。また長期休暇を利用して海外留学を通じて同じような体験ができればいいなと思った。



モントリオールで学んだこと

木内 瑛 (Akira KINOUCHI)

農学部4回生

語学力・プレゼンテーション能力の向上と多文化のカナダでの生活を体感することを目的として、マギル大学での短期留学プログラムに参加しました。この2点を目的とした理由は、将来グローバルな環境で働くことを希望しており、そのために必要な経験だと考えたからです。

私は、宗教的多様性というグループに属しており、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、バハイ信仰の4つの宗教についてインタビューを行いました。教会やモスクを訪れ、「今あなたの宗教が直面している問題がありますか?」「自分の宗教が誤解されていると感じることはありますか?」など、普段聴くことの出来ない質問をすることが出来たことは、本当に貴重な経験となりました。インタビューを通して、宗教には社会的な役割と個人的な役割の2つの側面があることに気づきました。社会的な役割としては、世界をよりよくするために活動すること、他人のために行動すること、そしてコミュニティを形成することが挙げられます。モントリオールには移民が多く暮らしており、そうした人たちのコミュニティの形成と言う意味で宗教が大きな役割を果たしていました。個人的な役割としては、人生の目標を与えること、ストレスを減らすことが挙げられます。日本では、宗教に関連した病院や大学が多くみられ、社会的な役割を果たしている一方で、個人のよりどころとしての宗教の役割は薄いのではないかと感じました。

英語学習について、3週間という短い期間ではなかなかはっきりとした成果を出すのは難しいのではないかと感じました。ただ、グループディスカッション、インタビュー、プレゼンテーションを全て英語で行うことで、英語に対して耳が慣れリスニングの力は上がったのではないかと思います。また、モニター(グループのサポートをしてくれた現地の大学生)とは午後の活動を共にし、3時間以上毎日話をしたことでスピーキングに対するハードルが下がったように感じました。

モントリオールについて、モニターの方と一緒にお店のメニューや公共交通機関のアナウンスが全てフランス語であることに特に驚きました。ただ、店員の方は、フランス語が話せないと気づくとすぐに英語に切り替えてくれたり、英語版のメニューを持ってきてくれたりと、多言語社会ならではの光景だと感じました。また、ペットボトルの削減のために水筒を普段から持ち歩く人が多く、その人たちのために浄水器が多く設置されていました。モントリオールのそうした環境に対する意識の高さに感心しました。

このプログラムを通して、日本とは異なるモントリオールの多様性あふれる社会について学ぶことができました。一方で、自分の伝えたいことが英語にできないもどかしさも痛感しました。社会人になる前に、海外に対する見識を深めるとともに、さらなる語学力の向上に努めたいと思います。



日本では学べない事

峯村 俊儀 (Toshinori MINEMURA)

農学研究科2回生



私は、英会話に対する苦手意識の克服と多文化理解を主な目的とし、本プログラムに応募させて頂きました。その背景として昨年九月に参加した、某企業が開催するインターンシップでの経験があります。当インターンシップは、様々な分野で活躍する学生を集め、発展途上国であるベトナムに一週間派遣し現地企業で勤務体験をさせる、という内容でした。それまで海外経験が全く無かった私も、研究での取り組みを評価して頂き参加するに至りました。しかし、そこで置かれた環境は、自分以外の班員が全員帰国子女もしくは長期留学経験者というものであり、自分の英語力（特に英会話能力）の低さを思い知らされる結果となりました。この経験を通し、英語は読解力があるだけでは不十分であり、コミュニケーションを満足に取れて初めて意味のあるものであると痛感しました。また、あらゆる国籍の友人を持つ班員を見て、自分も英語を通してより多くの人々の価値観に触れ、自分自身の視野を広げていきたいと感じるようにもなりました。現在は研究活動にも専念しており長期留学は難しかったので、上記の目標を達成するきっかけだけでも掴めれば、と判断し本プログラムに応募させて頂きました。

この短期留学で、語学研修と並行して、私は「宗教の多様性」についても学びました。その一環として、キリスト教、イスラム教、バハイ教、ユダヤ教のそれぞれの施設を実際に訪ねインタビューをし、その回答を比較してみると言う調査を行いました。その結果、互いに相入れない部分があったり、重要な部分では案外共通部分が多かったりと、とても興味深かったです。移民ゆえに宗教においても多様性が維持されているカナダでは、各宗教が互いに尊重し合うことで絶妙なバランスの下で共存しているという構図が見えてきました。これらは日本には得られない価値観であり、この点からも当プログラムに参加して良かったです。

しかし、各施設で出会った素晴らしい方々との対話は、自分の考えが完全に伝えられたものではありませんでした。日本語では頭に浮かんでいるのに英語が出てこない、と言うような、もどかしい場面も多々ありました。そのため、今後彼らのような素晴らしい方々と、より質の高い会話が出来ようになる事を目標とし、英語学習にさらに励んでいこうと思います。

環境問題への日々の一歩

R.S.

人間環境学研究所 2 回生

「英語は無理」が口癖だった。来年からマスコミ関係の仕事をする事が決まった後も、「日本語で伝えるのだから大丈夫」と高をくくっていた。しかし、そうはいかない現実を薄々感じていたのも事実であった。テレビや新聞で、日本のことしかやっていないわけがない。いつまでも「私には海外は無理」と言っている場合ではなく、むしろこれからは「自分」が海外の出来事を発信する立場になるのである。インターネットで誰もが情報を発信できる時代のマスコミの最大の役割は、一次情報を取ってくることである。誰かが教えてくれた、翻訳してくれたものを拾っているわけにはいかない。積年の英語問題と直面した卒業間近の夏、私はマギル大学の研修に参加することを決めた。

研修では班ごとのテーマに分かれ、地域の人々にインタビューを行った。私の班は都市の環境問題における持続性を扱った。最も印象的だったことは二つある。一つ目は、モントリオールの環境問題への意識の高さである。恥ずかしながら我が日本が低すぎるともいえよう。まず、買い物では黙っていても袋がついてくることはない。時々袋をもらうこともあったが、リサイクル表記があるか紙製であることがほとんどであった。また、多くの人々が水筒を携帯している。エコに対する小さな行動一つ一つが、日本とは異なっていた。

二つ目は、コンポストシステムが多く家庭で導入されていることである。生ごみを集め、堆肥に変える取り組みである。この取り組みに参加している家は、コンポスト用のゴミ箱が置いてあるのですぐにわかる。私のホストファミリーも参加していたし、街を歩いているといつもこの茶色のゴミ箱を見かけていた。コンポストの都市への導入には、ハエがたかる、においがするなどのいくつかの問題点もきくが、むしろ本来の生き物の正しい姿であると思う。すこしのデメリットを踏まえても、環境への取り組みを優先するモントリオール市民に感銘を受けた。日本へもこのシステムを普及させたいと強く思う。

インタビューも生活環境も何もかもすべて英語だったため、英語に対する抵抗感はかなり薄れた。はじめは自分から人々に話しかけることはなかったが、最終週は会話の量が増えた気がした。この研修を通じ、語学能力の向上をはじめ、カナダと日本の環境問題への取り組みの差を痛感した。いま、環境問題は地球上のすべての国で緊急に取り組むべき課題である。先日行われた気候変動サミットでは、日本の石炭火力発電所新增設に厳しい目が向けられた。一人一人の行動で、すぐに大きな政策を変えることはできないが、カナダのように、日常の小さな行動から意識を変えることはできる。来年からは、プラスチックの袋を辞めたり、ごみをリサイクルしたりすることが日本の常識となるように、海外の様子や環境問題のニュースを伝える仕事をしていきたい。